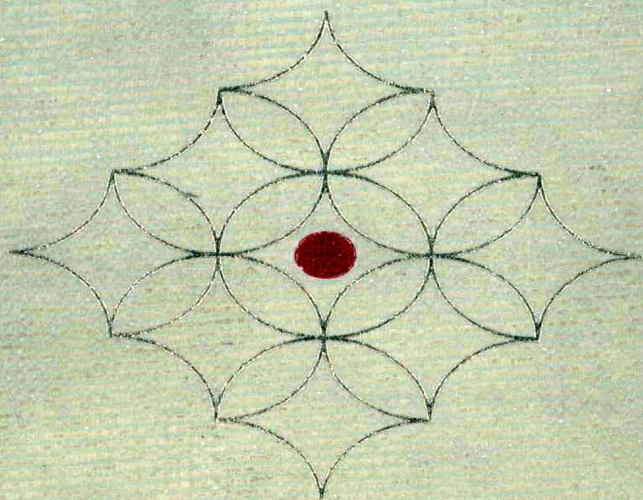




現代日本文學大系

76

石川 淳
安部 公房 集
大江健三郎

筑摩書房



現代日本文學大系 76

昭和四十四年五月十五日
昭和四十八年一月三十日

初版第一刷発行
初版第三刷発行

石川淳・安部公房・大江健三郎集

著者

発行者

石川淳
安部公房
大江健三郎
井上達三

発行者

東京都千代田区神田小川町二ノ八
筑摩書房

郵便番号一〇一―九一
電話東京(二九一)七六五一
振替口座東京四一二三

印刷 株式会社 精興社

製本 株式会社 鈴木製本所

落丁本・乱丁本はお取替いたします

(分類)0393(製品)10076(出版社)4604

石川淳集 目次

卷頭写真
筆蹟

普賢

曾呂利咄

無尽燈

焼跡のイエス

おとし
ばなし 堯舜

片しぐれ

鷹

紫苑物語

靈藥十二神丹

三 四 五 六 七 八 九 一〇 一一 一二 一三 一四

喜寿童女

二五

安部公房集 目次

卷頭写真
筆蹟

S・カルマ氏の犯罪―壁―

二六

赤い繭

二〇

バベルの塔の狸

二三

闖入者

二五

鉛の卵

二六

無関係な死

二七

時の崖

二八

詩人の生涯

二六

大江健三郎集 目次

卷頭写真
筆蹟

芽むしり 仔撃ち

二九

死者の奢り

三〇

人間の羊

三七

不意の啞

三九

後退青年研究所

四五

〔付録〕

石川淳文学の革命伝説

野口武彦

四五

移動空間の人間学——安部公房論——

磯田光一

四六

大江健三郎論

渡邊廣士

四九

年譜

四九

著作目録

四七

石川
淳
集

日晴れては冬木
の寸かた氷中る
赤い影踏み
松尾此道

来高

盤上に散つた水滴が変り玉のやうにきらきらするのを手に取り上げて

見ればつい消えうせてしまふごとく、かりに物語にでも書くとして垂井茂市を見直す段になるとこれはもう異様の人物にあらう、どうしてこんなものにこのころ惹かれたのかとだまされたやうな気がするのは、元來物語の世界の風は娑婆の風とはまた格別なもので、地を払つて七天の高きに舞ひ上るいきほひに紛紛たる浮世の塵人情の滓など吹き落されてしまふためであらうか、それにしてもこれはちよつと鼻をつまめばすぐ息がとまるであらうほどたわいのなさすぎる男なのだ。しかしそんな取柄のない男のどこがおもしろいかといへばじつにその取柄のなさ加減で、これほどつまらぬところばかりで出来上つてゐる人間もないものだ、かう捏ねかへしはじめてはきりのないはなしであるが、それはなにも宿酔のわたしの頭が混沌としてゐるせゐばかりではなく、午前十時のベッドの中でもちもぢしてゐる所在なきの妄想であらう。そもそもこのベッドといふのが垂井茂市のベッドであつてみれば、やはり念頭にちらつくのは……ええ、もう垂井茂市なんか鬼に食はれると、わたしはばつと跳ねおき、アパートの重宝は室内に備へてある水道の栓をひねつてぢやぶぢやぶと顔を洗ひかけたとなん、外から扉をこつこつ、「垂井さん、垂井さん。」黙つてゐると、鍵のかかつてゐない扉を向うから押して鼻づらを突き出されたのではよんどころなく、「なんだ。」「日の出新聞ですが……」「何の用だ。」「御勘定をいただきに來たんです。」「今ゐないから判らない。」「あなた、垂井さん

ぢやないんですか。」「ちがふ。ゆうべ初めて来て泊つたばかりだ。」「へえ。」「垂井はもう勤めに出かけた。」「いつごろお帰りです。」「判らない。」「もう二月たまつてゐるんですが、いつ来ても居るひとが變つてゐるんで……」「そんなこと知るか。」「こまるんです、いつでも留守ぢや。」「こまつても仕方がない。まあまた来てみたまへ。」「洗つてゐる相手をやつと押し出した扉の外で、ばたばたと遠ざかつて行く草履の音とともに残した捨ぜりふは、「ふん、だれがだれだか判りやしねえや。」「それはこちらも同然で、垂井の巢ではあるもののいつたいこの部屋の借主はなにものなのか、わたしはまだ知らないのだ。

昨夜、映画を見に來たかへりに新宿の裏町を歩いてゐるとすれちがつたのがこの茂市で、洋服だけはいつも氣にしてゐる流行型、びんと張つたボーラの肩をつぼめながら、「いや、どうも……」といくらかきまりわるげに作り笑ひをして見せたのは二三ヶ月前わたしのところから持つて行つたきりの時計のことをさしたのであらう、とたんに陽氣な調子に變つて、「ちよ、ちよつとそこで。よく知つてゐるうちがありますから。」なにもいはず近くの小料理屋へわたしをつれこんだ手ぎはこれと芸のうちか、万事腰の輕いのを身上につい半年ばかり前まで浅草の某喜劇團の楽屋にうろつてゐた男である。といつても役者ではなく、表方ともつかず、ある幹部役者の男衆同様に雑用をたしてゐたまでのことだが、もともと堅氣の勤め人型に出来てゐるくせに地道の仕事には尻が据らず、やつともぐりこんだ盛り場の灯に当人は蛇のやうに羽根をひろげ、劇団の名刺をもつてあちこちに顔を出すとか、地廻りのたれかれに、やあ、やあと挨拶しながら仲見世を歩くとかわけもなくふはふはしてゐても、持前の泥臭さは茶色の山高帽をどうかぶり直さうと土地の水になじまぬうへに、頼みに思ふ幹部役者が一座を脱退して関西へ落ちた後は身の置場がなく、その役者の友だちであるわたしのところ、下谷車坂の借間の二階にこゝろげて來たのがこの一月末で、ちよつと二三日が一週間になり半月になり、初めのうちはどこへ行くのか終日外に出てゐたが、つひには行先もなくなつたと

見えて昼間も畳にごろりと伸びたきり、「あーあ、鯨になつてえなあ。ぽかつと浮いて、気がむいたときにぶうと潮をふいて、のんきでいいなあ、あーあ、鯨に……」「ここで鯨になられたんぢやばくがこまるよ、茂ちゃん。何かいい口はないか。」「いいえ、あたしだつていつまでこちらに御迷惑をかけたかないんで。じつは政党のはうに偉型をひとり知つてゐるがあるんで、いろいろ頼んでありますから、そのうちどうにかなると思ふんです。もうぢき……」「居るのはかまはないがね、狭いところに鼻を突きあはせてたんぢやきみも愉快ぢやないだらうし、こつちにも仕事……」「どうです、お仕事のほうは。なんていひましたつけね、クリ、クリスト……」「わたしの書きかけてゐるクリステイヌ・ド・ビザンの伝記についてこの男にはなす必要はないので、」「ぼくのことよりきみのことさ。」「ええ、ですから、けふもこれから……」と出て行つたのが数日かへらず、やがて十日ほどたつてあらはれたときには質から出したばかりであらう畳皺のついたビロッド襟の外套を著て、ホープの鍔を一つみやげに、「あたしも、今度かういふことになりましたから。」とさし出した大型の名刺には神田の某無尽会社と勤め先を記し、自宅として四谷区番衆町×番地アパート紅花荘と町ところに電話番号まで刷りこんであつた。「大した御出世だな。」「ええ、お陰さまで、これから堅氣になつてはたきます。」「結構だ。」「ときに、ちよつと時計を借して下さいませんか。なに、あした持つて上ります。近いうちに買はうと思つてゐるんですが、今夜会があるもんですから……」それ以後ざつと三月の余、昨夜偶然出逢つたのだが、「あれはうごかなくなつたんで、今直しにやつてあります。そのうちお届けいたします。」で時計のことはそのまま、小料理屋でちよつと飲んで「勘定」といふと、「いいんです、ここは。まあ、よござんす。」と店の奥へ立つて行き何やらひそひそ。外に出ると、「このさきにおもしろいうちがあるんですが……」「二三軒まはるともう一時過ぎで、タクシイを呼ばうとすると、「遅いから、あたしんとこへ泊つてつたらどうです。まあ一遍来てみて下さい。ぢきそこでです。」

かうして遊廓裏のアパート紅花荘へ、部屋にはひるとすぐ、「十銭玉ありませんか。いえ、ガスをつけようと思つて。」鍔をさかさに振るとばらばら番茶の屑がこぼれるばかりでは手詰りのていと見えたにも拘らず、家具調度の類は一応かたちをつけて、部屋に備附らしいベッド長椅子のほかに小さい書棚には通俗読物が五六冊、硝子棚には珈琲茶碗リキュール・グラス一揃、からながらジョニウオカの壺もならび卓上に挿した芍薬は凋れてはゐるが花瓶は九谷焼、壁にかかつた裕の丹前は仕立おろしと見える八端、それに結城の半纏が重ねてゐるのに、「ひどく納まつてゐるぢやないか。」「いえ……」「きみひとりぢやないのか。」「ええ、ときどき友だちがやつて来るんで……」おしやべりの舌が急にどもりがちになつたのは知られたくない筋でもあるのかと、わたしはすすめられたベッドに、茂市は椅子の上にごろりと寝るとすぐ「ん」なり、かうして一夜明けたこの朝の始末である。茂市は起きると茶も飲まずに、「どうぞごゆつくり。鍵は置いてきますから、おかへりのとき帳場に預けといて下さい。」と匆匆出て行つたところをみればともかく勤めはもつてゐるのであらうが、無尽会社の月給といつてもせいぜい四五十円止りと察せられる収入ではおそらく二十円は取られるにちがひないこの部屋の維持はおぼつかなく、なにか金の蔓を見つけたのかと、わたしは新聞配達を逐ひ払つたあとから部屋を出て戸口に「垂井」とならんで「寺尾」の名札を見上げたときにも別に不思議とは思はず、その「寺尾」がなにもものであるか氣にもとめずについ下谷の寓居に帰つた。

さて、以上述べたところに嘘はないのだが、じつはわたしはその中で故意に語ること避けた一くだりがある。理由はそれにふれることがいやであつたといふばかりだが、元来垂井茂市のはなしなどを喜びいさんでしゃべつてゐるわけではなし、今下谷車坂の部屋にもどつて来て書きかけのクリステイヌ・ド・ビザンの稿を続ける前に一応昨夜の顛末を思ひかへしたにすぎぬことながら、好き嫌いをいふくらゐならば初めから何もいはないに如かず、すではなしかけた以上ある

部分だけをわざと伏せておくのは無意味と考へられるので、つぎにそれをつけ加へるとしよう。まづ最初に寄つた小料理屋で見かけた女のこと……いや、そんな取りとめのないはなしよりも、後におこつたにがにがしい出来事を思ひきつてぶちまけてしまはう。

ありやうは新宿裏から紅花荘まで来る途中、遊廊の中で三四十分ほどむだな時間がすごされたのだ。といつても女どもが目当ではなく、「どうです、ひやかしてみませんか。バーの設備などありますぜ。」と立ちどまつた茂市が「ちよつと……」と手を出したのは先刻からこちらのふところを見すかしてゐたのであらう、札を一枚さらふとついにはらの店先へ、そこにゐた男と小声ではなしてゐたかと思ふともう靴を脱ぎかけ、外のわたしにふり返つて、「上りませんか。」二階であやしげな珈琲を飲んですぐバーのはずが別別の部屋に案内されるらしいのに、「茂ちゃん……」と呼びかけても先方は急に酔つたふりをして、「まあ、いいぢやありませんか。え、いいぢやありませんか。」と早くも廊下の角に消えてしまつたので、わたしもやむをえず小さい部屋へ、さいはひ案内して来た女がすぐ出て行つた後でベッドの上にあふ向けになり、赤い笠の附いたスタンドの下で遠くのレコードが時花唄を鳴らしてゐるのを聞いてゐると、突然どたんばたんとひびきわたるさわぎは真向うの部屋らしく、もつれあつたからだに扉にぶつかる物音につれて、「なめるねえ、野郎。てめえなんかになめられてて宿が歩けるかつてんだ。なに、つれて来る。おもしろえ、つれて来い。何でもつれて来い、相手になつてやらあ。」といふ罵声はまさしく茂市であつた。「そんな乱暴……」「何が乱暴だ。ちやんと下でわたりをつけの、をばさんにも通してあるんだ。あしたの朝まで梃でもうごかねえぞ。」だつてこのお部屋でこのお値段ぢやショート・タイムで。お泊りなら……」「何をいつてやがんでえ、てめえ時間が判らねえのか。今何時だと思ふ。」「いくら引け過ぎでもこれでお泊りなら下のお部屋で……」「ふざけるねえ。ワリなんかをかしくつて……」とたんにわたしの部屋に駆けこんで来た女が、「ちよいと、起きてよ。あん

たのおつれよ。」「なんだ。」「いやだよ、このひとは、おちついてて。こまつちやふわ。起きてつたらさ。」「これをしほに帰らうと廊下に出て、「どうしたい、茂ちゃん。」「まあ、黙つて。あたしに任しといて下さい、あたしに……」スウェーターを著た男を壁ぎはに押しつけてゐる茂市の腕に五十がらみの女がぶら下るやうに取りすがつて「およしなさいよ、にいさん。中どんに罪はないぢやないの。あたしがわるかつたんだから、どうにでも顔を立てるわよ。こつちへ来てよ、こつちへ。」「初めに通された階段のすぐ上の部屋にもどり、わたしが口の出しやうもなくソファにかけて成行を見てゐるあひだに、立ちはだかつた茂市が「甘くみるねえ、何だと思つてやがんだ。」「判つたわよ、にいさん。お見それしてすまなかつたわね。これで我慢しておとなしく帰つて頂戴よ。」「何も因縁をつけに来たわけぢや……」「いいからさ、静かにしてよ。こりやあたしの計らひなんだから、すこしでも我慢して……」「仕方がねえ。さういふんなら帰つてやらう。」「階段のおりぎはに肩でわたしを突いた茂市がそつとあけて見せた掌には五十銭銀貨が数枚光つてゐた。外へ出ようとすると、店先に立つてゐた男たちの眼が獲物を待ちかまへたやうにぎらりとして、向うの軒下電信柱のかげなどに二三人づつかたまり合つてこちらを睨んでゐたのはおなじ仲間であらうか、その殺氣立つた中を悠然らしく肩をそびやかした茂市とならんで数歩行き過ぎる後から、「おい、挨拶してかねえのかい、挨拶を。なんとかいいつてもらはうぢやねえか。」「かつかつと靴の踵を鳴らしつことさらに胸をそらして歩き出した茂市がまつすぐ向いたまま声をひそめて、「ふり返つちやいけませんよ、ふり返つちや。黙つて、黙つて。」なほも吠え立てるさけびを背についた先の角を曲り大通に出ると、いきなり茂市が一目散に駆け出したのに、わたしも釣りこまれて駆けつづき、むらがるタクシイのライトの中に、あちこちの露地の暗がりや夢中でぐぐり抜け、急にしんと寝しづまつた素人家の裏町に出てやつと足をゆるめ息をつきながら、「おい、たいへんな附合をさせるぢやないか。」「どうもすみません。ついはずみであんなこと

になつちやつて。でも思ひがけず電車賃を稼ぎましたよ。ちやうどひどくシケてたところなんで……」ああ、これは何たるさまであらう、こんなはなしを口走るわたしもどうかしてゐるが、そもそも此の如き汚点に満ちた世の中の地形こそわたしをして趣味に反してまでこの報告をなさしめる元ではないか、かくあきまじき種族が蔓延してゐるこの国土の成行はどうなるのであるかと、今わたしは寓居の机に倚つてうんざりしながら、ついではなすつもりでゐたある女のこと、かの小料理屋で逢つた女のこととすでに感興をうしなひ、このやうにむなしく道草を食つてゐるひまに目下手を著けてゐる歴史の詮索でもつづけたはうがはるかに性に合つた役割であらうと、颯と頭を振つて窓をあけ放ち、をりしも晴れわたつた初夏の空を仰ぎながら、ここにわたしたちのおもひは十五世紀の初め仏蘭西ポアシイの僧院に於ける老いたる巾幗詩人、頽齡と戦禍のためにあはや絶えようとするたましひをふるひ立て、最後の翅のはためきにジャンヌ・ダルク頌歌をうたひ出でたクリスティヌ・ド・ビザンのうへに飛ぶ。

二

歴史家は何といふか知らぬが、わたしはジャンヌ・ダルクの伝記を書くことなしにクリスティヌ・ド・ビザンの伝記を書くことができない。といふことは……だが、はなしがお筆先にならないために、まづクリスティヌの素姓を略述しておかう。一三六三年ごろヴェネチヤの占星術師兼医師トオマ・ド・ビザンの娘に生れたクリスティヌが五歳になつたとき、父のトオマがフランス王シャルル五世に聘せられ一家をあげてパリに移り、爾来クリスティヌは庭訓に恵まれ詩文の婦徳に資するあるものは博くこれを涉獵したと伝へられる。十五歳以前早くもフランス朝の廷臣の一人と結婚し、君寵の厚い父親とともに家は栄えたが、二十五歳のとき夫は三子を遺して早世、その後この婦人の生涯は荊棘の路であつた。これよりさき一三八〇年シャルル五世逝き、支持者をうしなつたトオマ・ド・ビザンも次いで没してゐたので、運

の目の交つた中に三人の遺児と養ふべき老母とを抱へた貧しい寡婦としては、はかなくも文章のたしなみを切売するほかに道なく、かうしてわれわれは数世紀の昔に職業的女作者の魁を発見する。最初に書かれたのが恋の詩であるにも拘らず、記録に依ればこの詩人の愛情はもつぱらわが子のうへにそそがれてゐたのみで、恋を歌ふためには「詩人にてはたらじ、まづ恋人にこそ。」といふポアロオのことばとはおよそ相反するものであつたさうだが、クリスティヌはやがて散文に転じ、しかもそれを金銭に換へるに際しては當時の習慣のごとく教会の援助に俟つことなく、かずかずの物語の写しを直接一般読者に頒つて活計の手段を講じ、まことに作者みづから述べてゐる通り「われ女なりしが男となり」おほせた傷心の姿貌であつた。これらの作品の価値については文学史家の筆に譲るとして、かほど懸命の努力をさへ無慙にも蹴ちらしたものは、ただ世路の艱嶮ばかりではなく、そのころフランスの国土を震撼した災禍の中に巻きこまれたためで、仔細は贅言におよばず、一四〇〇年前後にまたがる大事件といへば百年戦争の惨苦にほかならぬ。フランスの王位継承の権ありと称するイギリスは黒太子以来数十年懸軍海を越えてしばしば北辺を襲ひ、シャルル五世の没後シャルル六世狂疾を病んで内政大いに乱れるや北仏の地はまつたく敵騎の蹂躪に委ねられ、一四二〇年代に入つては国王シャルル七世さへ安住の地なき世のすがたでは文章を弼ぐすべもあらず、クリスティヌはつとに難をポアシイに避け僧院に隠れる身の上となつてゐたが、かくて蟄居十一年、一四二九年五月初めて大天使聖ミカエルの天啓をかうむつたジャンヌ・ダルクが古のシャル・マルテルの武烈を伝へる名剣を執つて起つにおよびオルレアンの囲みは解かれ、ついでレンスに国王踐祚の儀あり、捷報またポアシイにも至つたとき、今は老いさらばへた女詩人は七十年の精根をここに傾けて少女讚仰のために歌ひ出でた。やがて一四三一年五月三十日ルアンに於ける少女刑死の後を追つてクリスティヌもまたほだなく没したといふ。

さて、わたしのクリスティヌ・ド・ビザン伝は詩人の生涯の最後か

らはじまる。古い玩具に、小さい紙の正方形の六面にそれぞれ異つた絵の一部分を描き、その数個の各面を適宜に組み合はせることに依つて六種の図柄をあらはす遊びがあるが、わたしはいかなる女に對しても、それが一つの絵であると同時に他のしじかの絵を描き成すに至るであらう部分と見て、その渾然たる大図に参加すべき要素を探さうとする古風な癖がついてゐるので、ここにジャンヌ・ダルクの神靈に通ふ類朽の老女のたましひにふれることは揣らずも女性について語る契機となる。ジャンヌ・ダルクの出現をぼつかり宙に浮き出た荒唐無稽のまぼろしと眺め去ることなく、地上の塵にまみれ砕けた多くのクリスティヌの粉末が天日に舞ひつどふ花輪のけしきと観じつつ、逆に世のさまざまの女のすがたにジャンヌ・ダルクのひと一瓣を拾ひ上げようとするのは愚かしいわざであらうか。オルレアンの少女とボアシーの老女とを併せ書かうとするのは塵と花とが吹きとどる変化微妙の女の顔を描き出さうといふころざしに発するもので、いささか跛の譬ながら、この二人女のあしらひはいはわたしの趣向に係る見立寒山拾得である。寒山拾得が文殊普賢の化身ならば、文殊の智慧などおよびもつかぬ下根劣機の身としては寒山の真似よりもまづ拾得の真似で、風にうそぶき歌ふ前に箒をかついで地を払ふ修業こそふさはしからう。しかし、かりにも拾得の箒を手にした以上、町角の屑を掻きあつめるだけではすまず、文殊の智慧の玉を世話に碎いて地上に撒き散らすところこそ本来の任務で、それなくしてはこの世の莊嚴は期しがたく、何もおのれが還相の菩薩だなどうぬ惚れてゐる次第ではないが、そのうぬ惚れのかけらさへなかつたとしたらわが存在は空になるわけで、わたしの一挙一動が拾得の高風に似ても似つかぬ笑止の沙汰ではあるにもせよ、願はくはかの大士のおん振舞、おん身に於て百宝の花を放ちたまふ菩薩の遊戲、馥郁たる普賢行につながうとする一念を秘めてゐればこそ、前述の遊廓の件なども恬然とぶちまける勇猛心が湧いたのであつて、今や普賢菩薩はわたしの守本尊となつたのだ。

ここに下谷車坂の寓居の窓をあけ放つたわたしは机の前に坐り直し、

しばらくおこたつてゐた草稿を取り出してつぎのやうに書きはじめた。「歴史の詮索といふことが単に伝説のおちこはしに終るならばつまぬはなしで、わたしはジャンヌ・ダルクの神託について小ざかしい解釈をつけようとは思はぬ。まして少女が恋愛のために通力をうしなつたなどと称する俗説には荷担することができない。恋愛に於ける悲劇とはそれがために人間が墮落するからではなく、その翼に乗つて高翔するに堪へない人間精神の薄弱に由来するものではないか。もしわたしが女鳴神の狂言を書いたとすれば、恋愛のために通力を増すところの美女を書いたであらう。それがひとの力をそなふものならば、恋愛とはそもそも何であるか。ドムレミイの空の声からルウアンの火の柱に至るまで、ジャンヌはまさしく選ばれたる女性であり、それゆゑにこそ人類の歴史は美しいのだ。その美しさがないとすれば世のすべての女たちが美しくなりうる手がかりとてはないのみならず、この地上にはいつの日か沙羅の花がふるのであらう。詮索が誠らしく見え伝説が嘘らしく見えるといふことは、すなはち詮索こそ眉唾物だといふ証拠ではないか。さて、クリスティヌ・ド・ビザン……」

そのとき、梯子を上つて来る足音が廊下にとまつて「ごめん下さい。」応へも待たず部屋障子の障子をあけたのはこの宿の女主人葛原安子で、外出と見える盛装にふくらんだ中年女の肢体をかまど框いっぱいにはびこらせながら、「ちや、ごいつしよに願へません。」何です。「あかけふといふお約束だつたぢやありませんか。」え。「坂上さんに紹介して下さるつていふ……」「あ、さうさう。」「いやですわねえ、お忘れになつちや。」「うっかりしました。」だめですわ。さあ、およろしかつたら出かけませう。お洋服、これでですか。「そんなにいぐことはありませんよ。坂上は三時ごろでなければ事務所に来ないんですから。まだ正午を打つたばかりでせう。」「でも、けふでないとも都合が……」「ええ、判つてます、行きますよ。ちよつと待つて下さい。」

今ペンに興が乗つて来たいきはひに乘じて、無味乾燥なわが文章にいろどりを添へるために華やかなオルレアン軍記を書くつもりでゐた

ところへ急に横から顔を出したのにかうしてせつつかれたのではやむをえず中止するほかになく、クリスティヌ・ド・ピザンはさて措いて、わたしの知合の坂上青軒に紹介を迫る葛原安子について述べる羽目となつたが、それにはあらかじめこの素人下宿のからくりをはなしておつて必要があり、したがつて二階二間の隣の六畳を借りてゐるわたしの友だちの庵文蔵のこと、引いては文蔵の妹のユカリのことにふれずにはすまぬであらう成行にのぞんで、はたと吐胸を突かれるのは、じつはユカリのことといへばわたしは魂きえる思ひなのだ。だが、そこまで先まではしてはなしにかかる段になつてはとても手みじかにかたづけけるわけにはゆかず、当面の葛原安子にはしばらく下において待つてゐてもらはねばならぬ。

三

わたしがこの六畳に居をかまへたのはざつと一年前、最近かはつた宿のあるじの葛原安子よりも古顔で、庵文蔵はわたしよりもさらに一年ばかり前から住みついてゐるのだが、かうして二階の下宿人は据置のまま肝腎の下の経営者が入れ替つたについては、まづ先代の田部彦介のことから説きおこすのが順序であらう。

美しい壺はそれ一つだけで十分に美しいので対を求める要はないが、ありふれた壺をぼつんと一つ燠炉棚の上に置いても何となくおちつかず、似たやうなものを二つならべるとどうやら見られるといふのは、それがために品物が美しくなつたからではなく、どうならべても引き立たぬ凡流の中に落ち合つたそのけしきが一興なのであらうか。これはドン・ジュアンにスガナレルとかドン・キホオテにサンチョ・パンザとかいふ対照の妙とちがつて、田部彦介と前述の垂井茂市とは人物のはうでひとりでに吸ひ附いてしまつたかたちに見えるのも、そもそもこの二人を知つたのが同時であつたせいかも知れぬ。ところでその彦介のはなしであるが、もう四年ほど前わたしが浅草公園にぶらぶらしてゐたところ、今は関西に落ちてゐる友だちの喜劇役者が、「きみ、小

鳥がわかるかい。」「もちろん。」「ちや、付きあつてくれ。」「どこへ。」「日暮里だ。」「どうするんだ。」「小鳥を買ふんだ。」「鳥屋か。」「いや、素人なんだが小鳥が好きでたくさん飼つてゐるんださうだ。田部つてひとだがね、こないだわきで紹介されたんだ。ついでに犬も買はうかと思ふ。」「犬も売つてゐるのか。」「これも売つてゐるわけぢやないが、二三匹あるさうだ。」「行つた先の日暮里の曲りくねつた道をたどつて尋ねあてた町の角、低い檜垣で仕切つた百坪ほどの一劃にいづれも平家建三間ぐらゐるの小家が四軒、安普請ながら表に面した三軒は洋館まがひの窓をつらね、家と家とのあひだは通り抜けのできる狭い露地が走り、露地の奥に井戸があり、井戸のそばに押し詰められた格子戸の一軒が田部の住居で、信州沓掛の資産家の次男に生れた彦介が最後に剩した財産はこの四軒長屋ばかり、住居のほかの三軒から上る家賃が現在唯一の収入であることは後になつて知つたのだが、そのときわたしたちが露地にはひりかけると、井戸端で肌著一枚になつた三十五六の男が、をりから早春の風にひゆつひゆつと口笛を吹きながら、エアデル・テリヤの大きいのとフォックス・テリヤの小さいのが足に搦まるのを制しつづ、二つの洗面器に分けた汁掛飯を箸で掻きまはしてゐたが、足音にこちらをふり向くと小ぶとりのからだを鞆のやうに跳ね上らせ、「や、これは、おいでなんし。さあ、こちらへ、こちらへ……」とみじかい髭の生えた唇をそらしてせはしくしゃべりつづけ、「さ、さ、早く食へ、早く。」犬の背を叩いて洗面器を押しつけると、がちやがちやと井戸のポンプを突いてはだしの泥をこすりながら、「お組、お組、ぬねえか、おめえ。」硝子の格子戸の横手につづくこれも硝子の二間窓が力なくあいて、色あせた窓掛のかけから、ぞつとするほど顔の蒼い、白眼がどろりと淀んだ、かげろふのやうに痩せおとろへたのが垂れさがる髪を黒く細つた指で掻き上げつづ、「どうしたの、あんだ。」「これはひどくおちついたものでひややかな一瞥をわたしたちに投げ、「なんてさわぎするの。」「たいへんだ、お客様だ。」「何がいへんなのさ、お通ししたらいいぢやありませんか。」「

通された部屋の真中に半畳の大きい炬燵が切つてあるのは生国の習慣か、三月とはいへまだ寒い日のためにふさがずにあるのであらう、そのやぶれた掛蒲団をまくつて火をほちつてゐる相手に喜劇役者が、「おかまひなく、田部さん。」「いえ、さあこちらへ、どうかおたひらに。」「西向の表から上つてすぐこの六畳の南側は低い桓根ごしに隣の庭に接し、北側は台所につづいて三畳ほどの小部屋とおぼしく、入口わきの硝子窓の部屋、病人らしい女のゐるその部屋もやはり三畳ほどと察せられたが、ともに襖が立てきつてあるので中は判らず、総じて襖も畳も泥だらけなのは犬どものしわざであらうか、おまけに炬燵の上には猫も乗つてゐる有様、家具といつては古めかしいぼんぼん時計のほかに意外にもみごとな赤絵皿の二三枚が壁に懸つてゐるばかり、それよりも眼をおどろかすのは表の土間はもちろん部屋いづばいに吊られた棚の上にぎつしりならんだ鳥籠の数で、まづ九官鳥、そのころ時花の胡錦鳥、十姉妹、ローラ・カナリヤ、ほかに駒鳥、ひがら、四十雀、眼白、紅雀のたぐひ、藪とはいへ驚までひしめきあひ、ちいちいとさへづる音にはなし声さへも消されがちで、これは常ならぬけしきであつた。

「どうも大したもんですね。」と大仰に感心して見せた喜劇役者に、「なあに、これでもだいぶ減つてますんで。もとは猿もゐましたよ。」「へえ。」「ちかごろは小鳥のほかに犬が二匹。もう一匹のたんですが、こないだよそへ譲りましたんで。それにこの猫……」「よく猫が小鳥にかかりませんね。」「それがね、不思議にうちの小鳥とは仲がよくござんして。その代り近所の台所を荒すんでよく尻をもちこまれます。」「はあ。」「どれでもお氣に入つたのがあつたらおもちになつて下さい。それに、うちには人間もごろごろしてますんで、これもひとつ公園あたりで使つていただければ……」「御家族おほぜいですか。」「いえ、うちのものは女房ひとりです、そこに（と西側の襖をさして）寝てをりますが、取りみだしてをりますんで、御挨拶にも出ませんで失礼を……」「どこかおわるいんですか。」「なあに……」とこと

ばをにぞしながら、「どうも、あたしんとこにや、よく友だちがあつまつて来ましてね。そこにも（と北側の襖をさして）ゆうべの飛入がひとりまだ寝てます。もうひとり、ずつと居つてゐるのがあるんですが、これは今ちよつとそこまで。この男は亙大学を中途でよして、思はしい職がなくつてぶらぶらしてゐるんですが、ただ魚の見分がとてもうまい男でしてね。市場なんかへ行つて盤台をぢろり睨むと、あれはばちだとか、あれは三崎とか房州とか一眼でちゃんと判つちまふんです。もつともここへ来る前に魚屋の二階に居候してたんで……」

ところへ、時花唄とともに下駄を引きずりながら、よれた縞のオーヴァーオールを著たのが縁側のはうからぬつとはひつて来て、手にした一升壺と紙包をどさりと置くと、「彦さん、不漁でなんにもなかつたから蟹の雑語を買つて来たぜ……あ、お客様か。やあ、いらつしやい。」と初対面の挨拶も旧知のごとく、「ちやうどよかつた。さつそく一杯さし上げるか。」「さうだ、お茶代りに。」と彦介も浮き立つて、「ちや、きみに支度を頼む。ぼくはここをかつたづけとくから。」あつけにとられたわたしを前にして、彦介が雑巾で炬燵板を拭きはじめると、ひとり台所へ、やがて皿小鉢を載せた大きい塗盆を持つて、「へえ、お待ちどほさま。」とあらはれた、これが垂井茂市で、炬燵の片隅に割りこむと、「さあ、どうぞ、何もありませんが。」「ときに。」と彦介が、「まだ起きないかね、あつちは。」「さあ。」と茂市は炬燵に足を入れたままあふむけに倒れ、伸ばした手で北側の襖をばたばた叩きながら、「どうです、起きませんか。え、起きたらどうです。酒が来ましたよ、酒が。」「ううん。」とうなるけはひがして、「ちや、起きよう。」「あれだ。無理に起きないでもいいんですよ。飲んでくれなかつたつてこまりやしねえや。」「建附のわるい襖が軋つて、突き出した髪の毛をぶるつと一ふるひ、眉に八の字を寄せながらどてらの襟を掻き合せ龍甲縁の眼鏡を揺り上げた、その顔を見て、わたしが「あつ」とさけぶと先方も、「や、きみか。」「どうした、死んだんぢやなかつたのか。」「何をいふ。さう簡単にくたばるか。」「どこにゐたんだ、今ま

で。「国さ。ゆうべ出て来たんだ。」かねて死亡を伝えられてゐた旧友庵文蔵と、わたしはここでゆくりなくめぐり逢つたのだ。

庵文蔵とわたしとの交友のはじまりはもう十何年か前某私立大学の校庭に於ける出逢にさかのぼる。ある日の昼休み、当時予科生のわたしが級友のむれから離れて、校舎のうしろの塀に沿ひ砂まじりの雑草を踏んで歩いてゐると、その片隅に庵文蔵、おなじクラスながらまだかけががつて口をきく機会のなかつた丈の高い美貌の青年が独り洋書を読みふけてゐるのに、「きみ、何を讀んでるんです。」とたんに相手はぱたりと本を閉ぢ、雑草の上に足を伸ばしたまま強度の近眼鏡を脱むやうに光らせて、「きみ、ジョーヂ・ムウアについてどう思ひます。」「ひとの面をさかさに撫でようとするムウアの野心は祝福すべきものです。しかし、あつてのひらの生ぬるさからどんな戦慄がほとばしるといふんでせう。」齒の浮くやうな文句にもせよ、唐突な質問に対して平靜らしく応じたのはすべて学問とか芸術とか當時わけもなく崇高と鵝呑にしてゐたものの片鱗にでもふれた場合にはつい、赫とのぼせ上る癖がついてゐたためで、つまりわたしのうはべの平靜は興奮にほかならなかつたのだが、先方も劣らぬ逆上性と見えて、「それは無責任の放言でないためには説明を必要とするでせうな。」「ほかのはなしをしませう。ぼくが説明を回避するのを不誠実だと思はれるなら、では誠実のはなしをしませう。ひとが誠実について語るとき鹿爪顔をして見せる習慣をもつのは、あれは何の禁厭ですか。あたかも尻尾をはやさなければ悪魔のはなしができないかのごとくです。およそ誠実といふものは鹿爪顔や力瘤などにうかうか釣り出されるほどたわいのないものでせうか。それですむなら、世は収税吏と車曳の天下です。しかるに近代の作家は、作家の名に値する人物は車を曳く代りにペンを……さてそのペンのうごくところに、ペンを持つ手の脂、つまり作者の額の青筋とか、鼻の頭の汗とか、肩のいかりとか、そんな悪臭芬芳たるものがこびり附いてゐるとしたら、ああ、誠実の花はどこに咲き出るのか。何か書いて、書いてゐる当人のからだの恰好が見

すかされるとは、慘澹たる茶番です。ところでジョーヂ・ムウアは容易に姿をあらはして見せない漂渺たる怪紳士の一人です。だが、あれはウォルター・ペエタを心棒にしてくる廻つてゐる独樂のやうなもので、その心棒をつかんだときムウアの指先をにぎつてしまふのではないか。このウォルター・ペエタとはなにものであるか……」「はつはつは」と突然笑ひ出した庵文蔵が、「きみは今ひどく鹿爪顔をしてゐますね。といふことはきみのお説に依ればきみの演舌が眉唾物だといふ証拠でせう。ペエタがムウアを捕へる鍵ですつて。ノオ、ノオ、あれはただムウアの常談ですよ。あんな常談に引つかかるやうな、失敬、きみみたいな誠実な読者がゐるもんだから、ムウアもいい氣になつて、小説を書き出したんでせう。ぼくがムウアに教へられたことはただ一つ。どう書いても、結局あんなふうにしにかけないくらゐなら、やつぱり何も書かないでゐるほうがましだ……」おなじ逆上仲間と思つてゐた相手に、いきなり足を払はれて、「では、きみは勝手に笑つてゐたまへ、失敬。」砂利を蹴つて立ち去らうとするうしろから、「待ちたまへ、笑つたり怒つたりしてゐる間にはなしをすすめませう。」「何のはなしです。」「タアナアは……ええ、この本にさう書いてあるんです。タアナアは木の枝の一本一本が黒いといふことを知つてゐたが、全体を明るく描くために、枝の一本一本を明るく描いたとそれはよろしい、愚劣なる黒い枝を輕蔑することはばくも賛成です。黒い枝を黒く描いて見せるのが自慢だといふやつは鼻持がなりません。枝をして色をうしなはしめるやうな全体。だが、それがためにひとは画描きになつたり字書きになつたり、ああ、なんとさうざうしい。例へば小説、おびただしい文字。オノレ・ド・バルザック氏の書き散らした反古の山がいつたいどうしたといふんです。ムウアにしても、やれやれ、こいつもまた小説家かとぼくはがっかりするんです。ひとが何か書くといふのは氣がゆるんだときではないでせうか。」「それではどうして枝の黒さに、愚劣の強烈さに對抗しうるんです。」「ははあ、何か形式にあらはして見せるほかに何もすることがないかのやうです